

## 雪間の草から

今頃の時期、「花をのみ待つらん人に山里の雪間の草を見せばや」の「雪間の草」に千利休は、茶の湯の境地を見ていたという。清々しい春の息吹が感じられる。しかし、このような風情を楽しめる地域が、今年どれほどあったらだろうか。今年は総じて暖冬だった。これも気候変動の影響で、「温暖化」から「気候危機」へと地球は深刻な状況にある。

その気候危機の最たる例が、オーストラリアの森林火災。昨年8月から森林火災が相次いで起き、全土で日本の面積の半分にあたる1800万haを延焼して今も70カ所以上で燃え続けたが、最近では洪水に悩まされているとのこと。この火災の影響で10万匹もの動物が死に、コアラが「絶滅危惧種」になるかもしれない。

今年からパリ条約がスタートした。各国が提出したCO<sub>2</sub>削減目標を積み上げて「産業革命前からの気温上昇を2度未満、できれば1.5度に抑える」という目標は、現状では達成できない。日本は、世界で5番目のCO<sub>2</sub>排出国だからこそCOP25でもっと意欲的な目標を示す必要があった。今も石炭火力発電を進め、撤退時期を明示しない日本に対し、世界から非難が集中し、「化石賞」が渡された不名誉を早く挽回して欲しいと願う。

しかし、排出だけでは不十分で、CO<sub>2</sub>の吸収も考えなくてはいけない、地球環境研究の第一人者ヨハン・ロックストローム博士によると「今まで伸びてきたCO<sub>2</sub>のカーブを2020年から減少に転じさせ、そこから毎年6～7%排出を減らす必要がある。エネルギー転換など脱炭素だけでなく海、森林、土壌や水など地球全体を人間が、きちんと管理して自然がCO<sub>2</sub>を取り込む力を発揮できるように努めていかなくてはならない」

先ずは、私たちの身近な自然である四国の山々、吉野川や干潟そして海を守っていかなくてはと改めて思う。

藤永知子



## 九十三年前

### 昭和元年の十七ヶ所まわり

十六歳の春、大和のおばさん（六五歳）、出口の梅さん（六五歳）、キヨ子さん（二一歳）、大和の娘のシマノさん（二一歳）そして私の五人が十七ヶ所まわりにいくことになった。私は足に自信がなかったし、よく肥えていて内太ももがすれて痛いので、行くことをしくなんだが、回りのもんが心配ないいける。というので一緒に行くことにした。

朝早く起きて、一番に八幡さんのお参りをすませ、佐古回りで名田橋のたもとへ着いたが、春一番が吹き、渡しが出んという。それでは困る何とかして欲しいと頼み込んだら、バランスよく座れということのでなんとか出してくれた。しぶきがすごくて、腰から下はビショビショになった。

板東の大麻はんをお参りしてから、一番札所靈山寺に向かった。その後、大日寺過ぎたころから足が痛み出した。十番切幡寺になんとかたどり着いた。大和さんと私以外はその日に十一番の藤井寺まで行こうということだったが、とてもそこまでは行けんと頼み込み、その日は切幡寺でとまった。風呂あがりの足をみると水ぶくれしていた。朝起きて一步踏み出した痛さにどうなることかと思うた。明けの日、藤井寺から焼山寺に向かったがその途中の柳の水の庵でお接待を受けた。

衛門三郎のお堂があり、大きな杉の木を見ながら歩くと左の方にうえつのの部落があった。

途中でこうた二銭のゆで干し芋をかじりながら歩くと、気がまぎれた。その日は寄井までとして、知り合いの叔母さんがやっていた宿にとまった。途中で受けたお接待の米を宿代代わりにとってもらい助かった。一宮の十三番大日寺に向かってひたすら歩いた。着いたときの嬉しき。ここから常楽寺、国分寺、観音寺を参って、最後の寺、井戸寺に着いたのは日暮れ近い。朝早くから歩き続けた旅だ。もうひと踏ん張りと思って佐古道を引き返した。わらじ三足もボロボロになり、男物の足袋もやぶれていた。八万の自分の家に帰り着いた時は夜もふけていた。着のみ着のままの二泊三日の私の数少ない若い時の旅だった。

津嘉山郁子



## ～吉野川礼讃 16～

### 「おこうつつあん」高越山



スエドンの四方山話 奥越山 アワ中央橋からの眺めより

ここ徳島では、吉野川南岸（右岸）を西に向かって走る時、眼前には、台形に張り出した山が見える。それは、高所が高越山で、低い張り出しは、種野(山である)。

吉野川北岸（左岸）阿波市あたりからは、それが左右に裾をひく、実に美しい山容を見せる。「阿波富士」は、この山である。

もっとソラ、脇町には、越麓タクシーがあり、エツロク(高越の麓)という意味(言葉)は、幼い時は不思議なひびきをもっていた。更にこの山は、「おこうつつあん」と親しみを込めた呼び名をもっている。対岸の阿讃山脈の大滝山と石合戦をした伝説も残る。吉野川中流域には、欠くべからざる山である。

当然、その地理・山容から信仰の対象であり、山岳修験の祖、役小角によって開かれたとする高越寺が存在する。神仏習合、高越神社は、吉野川流域を支配していた阿波忌部氏の氏神 天日鷲命(あめのひわしのみこと)を祀る。

9世紀初めになる『古語拾遺』(古来の伝説を記した書)には、「忌部の一部が阿波に来て大嘗会に木綿、麻布などを貢ぎ、その郡名を『麻殖』とした」とある。高越山の奥木屋平の三木家は、<sup>あらたえ</sup>麓服(荒妙)を貢進する家柄ともある。

山川町山崎(山の先)忌部神社には、選ばれた織女が麻を織る織殿がある。今般の令和の大嘗祭にも、これら木屋平の麻が織られ、<sup>すきでん</sup>主基殿に麓服は無事進貢された。吉野川から見る高越山は、夕映に美しい。かけがいのない徳島の宝物である。

高越山は、またの名を<sup>ゆうま</sup>木綿麻山とも呼ぶ

河野眞理



## おいしい吉野川

## 舌平目 (ウシのシタ)

以前紹介した平べったいコチ、ヒラメは頭上を泳ぐ魚を襲う魚食魚で有るのに対し、紹介する舌平目(シタビラメ)は同じように海底に住みゴカイ類を主食にする。ただし魚たちは餌を捕る機会は意外に少ないため口に来るものは何でも食べることがある。

ウシノシタとも言われ、その姿形は牛の舌にそっくり。

最近では少なくなったがカレイ釣りの時に時々釣れて来る。

釣り針の掛かった口元は他の魚とは全く異なり、ネジ曲がったような真に不思議な姿で、言葉では表現は難しい、気持ち悪いと言う人もいる、しかし食すれば真に上品な味わいである。

料理は白い裏側から、小さなエラブタの近くを表の皮を残すように包丁を入れ、頭を持って裏返し、包丁で身を押さえながら頭を引いてやるときれいに皮が剥ける。適当な大きさに切り、醤油、酒、ミリンで煮魚に、身離れも良く食べやすい。また小麦粉を表面にまぶし塩コショウとオリーブ油でムニエルにするとこれは簡単、おすすめの高級料理に♪ この魚はスーパーマーケットでもよく見かけるので見つけたら是非買って料理に挑戦してください。値段も手頃ですよ。

美味しい吉野川  
ごちそうさま

さちのちち



### イベントお知らせ

#### 報告 (2019年)

月日	行事	内容
9月28日	総会	上月康則氏「junkanと私たちの生活」講演
10月26日	ウラギク鑑賞会	今年もひっそりと咲く

#### 今後の予定 (2020年)

月日	行事	内容
3月	春のウォーキング (湿地のグリーンウェイブー環)	予定していましたが中止いたします
6月	助任干潟観察会 予定	助任干潟で遊ぼう
7月5日	吉野川河川一斉清掃	国交省徳島7月の河川愛護月間行事の一環
8.9月	市民調査	シオマネキ調査、稚シオマネキ調査

#### 会員募集中 会費：1口1,000円

- お問い合わせ&お申し込みは事務局まで
- 振込先：ゆうちょ銀行  
吉野川ラムサールネットワーク  
口座番号 01640-6-52973

#### 吉野川ラムサールネットワーク

事務局 藤永知子

- Tel：090-7268-9448
- Email：taikazann@hotmail.com
- HP：[http:// www.yoshinogawa-ram.net](http://www.yoshinogawa-ram.net)
- facebook 吉野川ラムサールネットワーク